

中学生の学級での友人関係と学級環境との関連—相互理解活動の視点から—

専攻 人間発達教育

コース 教育コミュニケーションコース

学籍番号 M18009E

氏名 川北 香織

問題の所在と本研究の目的

学級環境を整えることが人の心に良い影響を与え、学級内の友人との交流を増やすことにつながると考えられる。しかし、今までに、学級環境と学級内の個々の友人関係との直接的な関連を検討する研究はなされていない。

そこで、本研究では、学級の友人関係における「相互理解活動」と学級環境との関連を明らかにすることを目的とする。相互理解活動とは、互いの相違点を認め合い価値観や将来の生き方などを語り合うつきあい方である。同時に、対比的な友人とのつきあい方として、「現代的友人関係」的なつきあい方(以下「現代的交友活動」と表記)についても同様に検討する。また、学級における友人関係の性質をより明らかにするため、学級に関係なく個人が特に仲良くしている友人との対比も行う。

学級環境については、教師が整えることができる物理的な環境面、具体的な生活習慣の確立、教師の生徒に対する振る舞い方、行事や授業に対して生徒が作る環境という観点で捉え、それらがうまく機能しているかという点ではかることとした。

調査

1. 調査協力者

大阪府 A 市の B 公立中学校 1~3 年生 510 名(男 301 名, 女 239 名)に対して調査を実施した。そのうち回答の得られた 459 名(1 年生 5 学級 155 名, 2 年生 5 学級 173 名, 3 年生 4 学級 131 名)を分析の対象とした。性別の割合は、男子 246 名(1 年生 73 名, 2 年生 103 名, 3 年 70 名), 女子 213 名(1 年生 82 名, 2 年生 70 名, 3 年生 61 名)である。

2. 調査時期

2019 年 10 月

3. 調査内容

(1)フェイスシート

①性別, ②学年・組の記入を求めた。

(2)友人とのつきあい方に関する質問項目

相互理解活動 榎本(1999)における「活動的側面」の中の「相互理解活動」の 10 項目(8 項目から修正), 長沼・落合(1998)の「ありのままの自分を出しているつきあい方」や「励ましあうつきあい方」の因子の中から, 11 項目を追加し, 計 21 項目を, 相互理解活動をはかる尺度として用いた。6 件法。

現代的交友活動 岡田(2007)の友人関係尺度から 20 項目を, 現代的友人関係をはかる尺度として用いた。6 件法。

なお, 本研究では, 友人カテゴリーの要因(学級の友人関係, 親しい友人関係)による違いを検討するため, 質問に回答する際に思い浮かべる相手として, 学級内の友人関係と親しくしている人との友人関係の二者について, それぞれの相手に対して同じ質問に回答してもらうこととした。

(3)学級環境に関する質問項目

伊藤・宇佐美(2017)の「新版中学生学級風土尺度」8 つの因子の中から学級間差の大きさを示唆する級内相関が特に高かった「学級活動の関与」「学習への志向性」「規則正しさ」の 3 つの下位尺度 14 項目に, 物理的な環境や教師の生徒に対する振る舞い方など 10 項目を加え, 24 項目を学級の環境をはかる質問項目とした。5 件法。

結果と考察

1. 友人カテゴリーの要因による友人とのつきあい方の差

相互理解活動においては, 親しい友人の方が, 学級の友人よりも得点が高かった。現代的交友活動においては, 「評価懸念」, 「距離確保」で学級の友人

の方が、親しい友人よりも得点が高かった。「道化行動」のみ、親しい友人の方が、学級の友人よりも得点が高かった。

2. 学級環境についての学級タイプにおける友人とのつきあい方の差

学級環境の得点によって学級をタイプ分けしたところ、「積極的学級活動群」6学級(1年生4学級, 2年生1学級, 3年生1学級), 「非承認学級群」5学級(1年生1学級, 2年生1学級, 3年生3学級), 「学級環境不良群」1学級(2年生1学級), 「学習・規律重視群」2学級(2年生2学級)の4つのタイプに分かれた。

(1)相互理解活動について

親しい友人関係において、「相互尊重」、「自己開示」、「本来的自己」のどの項目においても、学級タイプによる有意な差は見られなかった。

学級の友人関係において、「相互尊重」では、「積極的学級活動群」および「非承認学級群」において、「学級環境不良群」よりも得点が高かった。「積極的学級活動群」は全体的に環境が良く、教師との関係も良好で、生徒が積極的に学級活動に取り組んでいる学級であると言え、その中で、学級活動を通して生徒同士の結びつきも強くなり、学級の友人との相互理解活動が多く見られると考える。

「教師の振る舞い」の得点が特に低く、どちらかと言えばあまり環境が良くない「非承認学級群」で「相互尊重」の得点が高かったことについては、予想とは異なる結果であった。教師に対して納得できない感情を持っている生徒が多い分、生徒同士の団結が強まり、学級の友人との相互理解活動が多く見られるのではないかと考えられるが、「非承認学級群」には3年生が多く含まれていたため、発達段階的に多く見られたとも考えられる。「自己開示」、「本来的自己」では、学級タイプによる有意な差は見られなかった。

(2)現代的交友活動

学級タイプによる有意な差は見られなかった。

3. 学級環境についての個人の認知タイプにおける友人とのつきあい方の差

学級環境の得点によって個人をタイプ分けしたところ「平均的認知群」(210名), 「否定的認知群」(92名), 「肯定的認知群」(70名)の3つのタイプに分かれた。

(1)相互理解活動について

親しい友人関係において、「相互尊重」では、「肯定的認知群」が「否定的認知群」および「平均的認知群」より得点が高かった。「自己開示」、「本来的自己」に関しては個人の認知による有意な差は見られなかった。学級の友人関係において、「相互尊重」、「自己開示」、「本来的自己」のどの項目においても、「肯定的認知群」、「平均的認知群」、「否定的認知群」の順に得点が高かった。

(2)現代的交友活動について

親しい友人関係においては、どの項目においても、個人の認知による有意な差は見られなかった。学級の友人関係において、「評価懸念」では、有意な差は見られなかった。「距離確保」では、「肯定的認知群」、「平均的認知群」、「否定的認知群」の順に得点が高かった。「道化行動」では、「肯定的認知群」が「否定的認知群」よりも得点が高かった。

結論と今後の課題

学級タイプにおける友人とのつきあい方の差については、全体的には、学級タイプによるはっきりとした差は見られなかった。しかし、1年生が多く含まれていた「積極的学級活動群」において、「相互尊重」の得点が4タイプ中一番高かったことは、学級環境を良くすることで、発達段階に関係なく、相互理解活動を増やすことができる可能性を示唆していると言える。

個人の認知における友人とのつきあい方の差については、学級の友人関係において、はっきりとした差が見られ、学級の友人関係における「相互理解活動」と学級環境に対する個人の認知との関連が明らかになった。

今後も、どのようにすれば学級内の相互理解活動を増やしていけるか考えていく必要がある。

主任指導教員 中間玲子
指導教員 中間玲子